

# 大柵木獅子舞の



【いま】1月2日、海前寺門前付近



【むかし】昭和57（1982）年10月17日の同じ場所

## いま、むかし

### 戦後から続いてきた 地域の伝統芸能

戦後間もない昭和25（1950）年、青少年の健全な育成を願って、宇出津大柵木の青年有志が獅子舞を始めた。休止した時期があるものの、今日まで受け継がれ、町の風物詩となった。正月や曳山祭で披露されてきたが、獅子頭たいしに対峙する踊り手を担う小学生は現在5人。そのうち3人が6年生ということもあり、いったん休止されることになった。大柵木獅子舞保存会の歩みを、踊り手の表情とともに振り返りたい。



▲【いま】1月2日



▲【むかし】昭和58（1983）年1月2日



（左）一行は「やつで」を持った天狗に先導され進む。（右上）海前寺本堂前で記念撮影。（右下）大柵木周辺だけではなく、宇出津の町全体を一日がかりで巡る。

**正**月2日は天候に恵まれ、太陽の光が降りそそぐ明るい一日になった。午前8時半、保存会員ら約30人が能登消防署前に集合し、衣装を身につけて海前寺に向かった。毎年正月の舞はこの海前寺から始められる。境内で踊ったあと、大晦日に預けた御幣ごへいを受け取る。御幣は家々を回った際に縁起物として手渡される。

海前寺を出発した一行は、舞を希望する家々を回りながら港沿いに進み漁協能都支所付近へ。路地を細かく巡り、仙人町、崎山を経て宇出津新港に正午すぎに到着した。獅子舞がしばらく休止になることが新聞で紹介されたため、行く先々で「寂しいね」という声が聞かれた。

食堂を貸し切りにして昼食・休憩をはさみ、午後は地元・柵木地区を巡る。大人たちが奏でる囃子はやしが、お神酒で一層にぎやかになった。午後4時頃、田の浦着。この日の移動距離は8キロメートルにも及んだが、子どもたちは終始笑顔だった。



（左）酒垂神社で休憩中。みんな本当に仲良し。（中）町じゅうにお囃子が響く。（右）笑ったり驚いたり、獅子を見た子どもの反応はさまざま。





▲昭和58年1月2日。この日も好天に恵まれ、記念撮影に臨む表情は一樣に明るい。



▲【いま】1月2日

▼【むかし】昭和58年1月2日

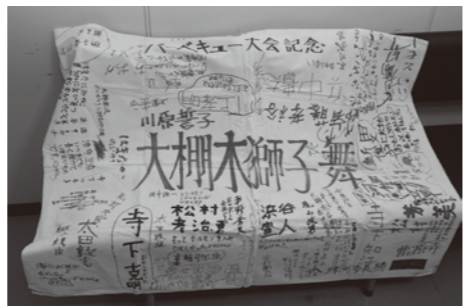


「天気に恵まれて良かった」と大柵木獅子舞保存会の会長の大町浩さん（＝宇出津山分）は今年の正月の舞を振り返る。保存会員は毎年、海前寺の除夜の鐘の手伝いをしていく。大晦日は風が強かったため心配していたという。強風は元旦も続いたが、翌日はとさおり雪がちらつくものの、

日がさす好天に。多くの人から声が掛かり、「最盛期とほぼ同じ件数」の踊りをこなし、成功のうちに終わった。6年生3人の卒業後は、踊り手が2人だけ。さすがに寂しく、すぐに獅子舞を復活するのは難しい。保存会では今後、毎年数回、大人だけでも集まって、道具整理などをして、という話をしている。



▲「御幣」の準備。今年は約130本を用意。大晦日から元日にかけ海前寺に預け、祈禱をうけている。（12月21日・宇出津分団詰め所）



▲昭和58年8月、バーベキュー大会を記念して作られた寄せ書き。大きな布にそれぞれの楽しい思い出が記されている。

# 獅子舞がつなぐ地域の絆

踊りの主役たちの【いま、むかし】



〈マサカリ〉  
濱谷威留君（6年生）



〈おだち〉  
齊藤 耀君（6年生）



〈二本棒〉  
新田陸斗君（6年生）



〈八尾〉  
濱中彩花さん（5年生）



〈一本棒〉  
濱谷美遥さん（2年生）

獅子舞を彩るのは、さまざまな衣装を身につけて、躍動感のある動作を見せる子どもたちだ。今年は5人の小学生が踊りを習得し、披露した。道具や動作が異なるだけではなく、踊りによって囃子もそれぞれ異なる。学年が高くなると、踊りの難易度も上がっていく。年末の約一週間、会員がつきつきりで動作を実演して見せるなど、踊りを熱心に伝授した。

練習の合間、子どもたちはボールを取り合ったり、追いかけて遊んだり、学年も性別も関係なく仲良く遊んでいる。学校とも近所とも少し異なる人間関係がある。



▲練習は年末にかけて実施（12月19日・能登消防署）

## 大 柵木獅子舞保存会

柵木獅子舞保存会は宇出津地区の「大柵木」「城山」の2町内に住む人で構成されている。獅子舞は2町内の青年有志による会「梅鳳会」が昭和25（1950）年に始めた。敗戦後の復興期、新しい日本をつくる子どもたちの健全な成長を願うことだった。大柵木の子どもは曳山祭の山車に乗ることができなかった。そんな子どもたちに祭りの楽しさを感じて欲しいという思いもあった。キリコ祭りだけではなく能登半島には多くの獅子舞が存在する。大柵木の若者は、穴水町北七海地区に獅子舞の伝承を依頼。踊りを習い、練習を重ねて正月や春の曳山祭で披露し、興を添えていた。（北七海の獅子舞は昭和44年に廃絶。）

昭和25年の獅子舞は、約10年間続けられたものの、いったん途絶える。本格的な復活は、昭和57（1982）年9月4日に大柵木獅子舞保存会が結成されたからである。

獅子頭は2体保管されていたが約30年の空白期間があったため、衣装や鐘など失った備品もあった。会員はこれらを新調したり、七見など近隣の獅子舞を視察したり努力を重ねた。復活の原動力になったのは、地元で伝わる芸能を何としても伝承したいという強い思いだった。

同年10月17日、海前寺の晋山式で無事に復活を果たした。地元でのお披露目では多くの祝儀が集まり、獅子舞が地域から期待されていることを強く感じた。以来、保存会でバーベキューを開くなど、大人も子どもも密接な絆を築いてきた。

昭和57年に小学生だった子どもは、今では親の世代。保存会員としてお囃子を担当したり、踊りを指導したりする立場になった。踊り手は自分の子どもが務める。大柵木獅子舞は戦後の何もないところから始まり、20年を超える空白期間を経て復活した。静かに復活の日を待ちたい。